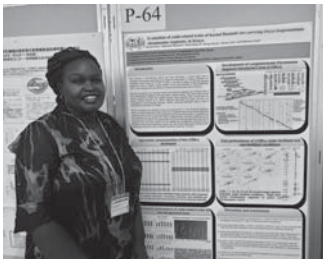
DIPLOMATIC TOUR: THE 39TH WORLD FOOD DAY参加

FAOの設立日を記念してWorld Food Dayが毎年世界中で開催されています。本年は、“Our actions are our future. Healthy diets for a #zerohunger world”をテーマとしたThe 39th World Food Day 2019 in IndonesiaのDiplomatic Tour（10月31日～11月２日、東南スラウェシ州クンダリ）に、16カ国の大使・領事、５国際機関とともに日本からはJICAと名古屋大学が参加しました。行事の中で、世界で２番目に多いフードロスの削減、輸入小麦量の10%を国産食料粉に置換えること、サゴヤシ等地域資源の利活用、小農の支援といった同国の目標が示されました。また、会期中には、農業省食料安全保障庁総局長らと日本の高等教育研究機関との連携について意見交換を行いました。　（江原　宏）

World Food Day 2019に集まった18ヶ国からの参加者

ケニア農畜産業研究機構研究員の招聘

農国センターは、2018年度より３年間の予定でJSPS研究拠点形成事業「アフリカ稲作研究イノベーションのための研究拠点と国際協働ネットワークの構築」を実施しています。同プロジェクトに係る研究交流活動のため、2019年９月23日～10月２日まで、ケニア農畜産業研究機構ムエア支所のエミリー・ギチュヒ研究員を招聘しました。ギチュヒ研究員は、鳥取市で９月25日～26日に開催された日本作物学会第248回講演会に参加し、共同研究の成果を発表しました。また、9月27日に名古屋大学生物機能開発利用研究センターで開催した「2019年度アフリカ向けイネ育種検討会」に参加し、共同研究の一環としてケニア農畜産業研究機構ムエア支所で進めているイネの品種改良の進捗状況について報告し、今後の育種計画について協議しました。　（槇原大悟）



日本作物学会第248回講演会で
ポスター発表を行ったギチュヒ研究員

ウガンダで国際ワークショップをIRRIおよびGREATと共催

2019年11月11～16日、ウガンダの首都カンパラにおいて、国際ワークショップ「ジェンダー視点に立ったイネ育種」を国際稲研究所（IRRI）およびGREAT（ジェンダー視点に立った農業研究を推進するコーネル大学とウガンダのマケレレ大学による共同プログラム）と共催しました。JSPS研究拠点形成事業「アフリカ稲作研究イノベーションのための研究拠点と国際協働ネットワークの構築」の一環として実施した本ワークショップには、コートジボアール、マダガスカル、セネガル、ブルンジ、ケニア、タンザニア、モザンビーク、ウガンダ、アメリカおよび日本から42名の研究者が参加しました。参加した育種学、作物学、社会学などを専門とする研究者は、ジェンダー平等を志向するイネ育種のあり方について学ぶと共に、各国のイネ育種プログラムをジェンダー視点に立って改善するための具体的方策についてワークショップ形式で検討しました。　（槇原大悟）

10ヶ国から集まった42名の参加者

根寄生雑草ストライガの防除に向けてケニアで実験開始

根寄生雑草ストライガは、アフリカの穀物生産に甚大な被害をもたらしています。農国センターは、トランスフォーマティブ生命分子研究所（ITbM）、アジア共創教育研究機構およびケニア農畜産業研究機構（KALRO）と共同で土壌中のストライガ種子を強制的に発芽させて枯死させる人工化合物（SPL7）を用いたストライガ防除技術の開発に取り組んでいます。2019年５月にSPL7をケニアに輸出するための手続きが完了し、SPL7の効果を実証するための現地栽培試験を開始しました。また、７月には、ストライガの遺伝的多様性を評価するためのフィールド調査、ストライガ防除技術普及のための社会経済的条件を明らかにするための農家調査も実施しました。本年10月、科研費（国際共同研究強化(B)）「根寄生雑草ストライガが引き起こすアフリカ食糧問題の解決に向けた国際共同研究」が採択となりましたので、現地での取り組みを一層強化し、SPL7を利用したストライガ防除技術の確立と実用化を目指します。　（槇原大悟）

ストライガの被害を受けて
収穫皆無となったソルガム畑